



Title	第1章 アイヌの家族形成
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 33, 19-33
Issue Date	2015-05-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59142
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_33_19-33.pdf



第1章 アイヌの家族形成

品川ひろみ | 札幌国際大学短期大学部教授

はじめに

本調査の対象地域である白糠町は北海道の東部に位置する。東西には釧路市、北には足寄町、白糠から内陸部西方面には約90キロ先に帯広市があり、北東には約80キロ先に阿寒湖畔のアイヌコタンがある。平成26年12月現在の世帯数は4,227世帯、人口は8,638人である。

本章では白糠町周辺に居住¹⁾するアイヌの人々の家族の状況やその成り立ち、次の世代へのアイヌ文化の伝承について明らかにする。またその際には、30歳代以下を青年層、40代～50代を壮年層、60代以降を老年層として、それぞれの年代が持つ特徴に着目する。さらにわれわれ研究グループがこれまで道内で行なった調査をふまえて、この地域のアイヌの人々がどのような傾向を持つのかについて明らかにしていきたい。

第1節 調査対象者の属性とアイヌの血筋

本調査の対象としてインタビューに答えてくれた者は48名、そのうち本人がアイヌの血筋を引いている者は37名、和人である者10名、不明とする者が1名であった。年齢層を見ると最も若い年齢は19歳、最も高い年齢は87歳であり、平均年齢は51.8歳であった。対象者を青年層から老年層までの年齢層別に見ると、青年層は16名、壮年層は12名、老年層は20名となっており、老年層の対象者が多く、それゆえ平均年齢がやや高めであることがわかる。また対象者の性別は女性が33名、男性が15名と女性が多くなっている。年代層別に見ると、青年層は女性が10名、男性が6名、壮年層は女性が7名、男性が5名、老年層は女性が16名、男性が4名であった。

対象者のアイヌの血筋について確認していこう。青年層16名の中でアイヌの血筋を引く者は13名である（表1-1）。残りの3名は和人であり配偶者がアイヌであった。アイヌである13名を詳しく見ると、父親・母親ともにアイヌである者は2名のみであった。他はすべて父親が和人、母親がアイヌの血筋であった。

次に壮年層12名のうちアイヌの血筋である者は10名、和人が2名である（表1-2）。和人の2名のうち1名は配偶者がアイヌであるが、もう1名は配偶者も和人だがアイヌの養父母に育てられたという者である。10名のアイヌのうち、父母ともにアイヌの血筋である者は6名となっている。

老年層は20名のうち、アイヌの血筋の者が14名、和人が5名、不明が1名であった（表1-3）。和人5名のうち、4名は配偶者がアイヌである者、1名は配偶者の養父母がアイヌであった。対象者がアイヌであり父母もアイヌである者は13名と老年層全体の半数以上である。

表1-1 青年層血筋

婚姻（現在）	本人	本人父母・血筋	配偶者血筋	配偶者父母血筋
既婚	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人
未婚	アイヌ	和人／アイヌ	－	－
離別	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人
未婚	アイヌ	和人／アイヌ	－	－
離別	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人
未婚	アイヌ	和人／アイヌ	－	－
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／アイヌ
未婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	－	－
離別	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	和人／アイヌ
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	和人／アイヌ
未婚	アイヌ	和人／アイヌ	－	－
既婚	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人

表1-2 壮年層血筋

婚姻（現在）	本人	父母・血筋	配偶者血筋	配偶者父母血筋
未婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	－	－
死別	アイヌ	和人／アイヌ	不明	不明
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	不明
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	和人	和人／和人	和人	アイヌ／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	アイヌ	アイヌ／和人	和人	和人／和人
死別	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／和人
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
離別	アイヌ	和人／アイヌ	和人	和人／和人

表1-3 老年層血筋

婚姻（現在）	本人	父母・血筋	配偶者血筋	配偶者父母血筋
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
死別	和人	和人／和人	和人	アイヌ／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／和人	和人	和人／和人
死別	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	不明
死別	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／アイヌ
未婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	－	－
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	アイヌ／アイヌ
死別	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
死別	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	不明
死別	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
死別	和人	アイヌ／アイヌ	アイヌ	和人／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	不明	不明	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	和人	和人／和人	アイヌ	アイヌ／アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	和人	和人／和人
既婚	アイヌ	アイヌ／アイヌ	不明	不明

第2節 血筋の濃さとその根拠

本人がアイヌで父親・母親ともにアイヌである者は平均すると 43.8%である（表1－4）。この比率はこれまでわれわれ研究グループで行なった調査結果と比較すると、新ひだか町における 45.6%に次いで高い比率であった。

表1－4 両親ともアイヌである

	青年層	壮年層	老年層	平均
伊達	0.0	25.0	50.0	29.8
新ひだか	22.2	47.8	65.0	45.6
むかわ	13.3	41.2	36.8	31.4
札幌	8.3	38.9	40.0	31.1
白糠	12.5	50.0	65.0	43.8

このように白糠町のアイヌは父親・母親ともにアイヌである比率が高いことがわかった。では祖父母世代はどうだろうか。表1－5は青年層、壮年層、老年層において父母ともにアイヌの血筋である者を抜きだしたものである。青年層2名、壮年層6名、老年層13名、合わせて21名のうち、祖父母もアイヌであると語られたのは、青年層は1名、壮年層は3名、老年層は8名であった。やはり年代が若い青年層では少なく、老年層のほうが純粋のアイヌに近い者が多いという結果となっている。

また本人の血筋が純粋のアイヌに近く、さらに配偶者についても同様なケースは1ケースが確認されたのみであった。アイヌの混血が進んでいることはこれまでの調査でも明らかになっていたが、上記の結果からはここ白糠においてもアイヌと和人の混血が進んでいるといえるだろう。

表1－5 2世代アイヌ

	婚姻（現在）	本人	父母血筋	祖父母
青年層	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	父方祖母和人
	未婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母すべてアイヌ
壮年層	未婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	父方祖父は和人
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	本人祖父母すべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	父方祖父和人
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	本人母方祖父和人
	死別	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
老年層	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	死別	アイヌ	アイヌ / アイヌ	不明
	死別	アイヌ	アイヌ / アイヌ	父方純粋 / 母親混ざっている
	未婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	父方純粋 / 母親祖父母不明
	死別	アイヌ	アイヌ / アイヌ	父方は薄い
	死別	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母不明
	死別	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ ※	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ
	既婚	アイヌ	アイヌ / アイヌ	祖父母はすべてアイヌ

さて血筋の確認は、本人の発言によるものだが「アイヌだと思う」という判断はどのような根拠によるものだろうか。インタビューの内容を見ると、青年層では「わからないけど」「多分」「母親

が、おばあちゃんが」「入っている」のように、アイヌの血筋であるか否かが中心で、それについて深い話につながることは少ない。しかし、年齢層が上がるほどに、確信をもって「父はアイヌです。母もアイヌです。…」や先祖から代々伝わる物を説明しながら血筋について話すことができる者が見られる。

- ・「(アイヌの血筋は父母) どっちも。(その上は) 母親の方もアイヌだし、こっちもアイヌだ。父も。祖母ちゃんか。祖父ちゃんも。どっちもこっちも。」(青年層)
- ・「じいちゃんも、ばあちゃんもアイヌだし。(お母様方のおじいさまとおばあさま。) たぶん、ばあちゃんの親もアイヌだと思う。そこまでしかわからない。」(青年層)
- ・アイヌです。「お父さんもお母さんもあります。(祖父母は) ううんとね。父親の方の、自分から見ればおじいちゃん、おばあちゃんも多分そうだと思います。多分そうだと思う。いやそうだと思います。おじいちゃんの上も。(祖父の上もアイヌか) そうですね、はい。お母さんの方の父親も、お母さんはどうなんだろう。母方の方がアイヌなんですね。」(壮年層)
- ・自分の母も父もアイヌの血筋です。母方の父も母(祖父母)もアイヌです。父方の父も母(祖父母)もアイヌなのかな。(母親に尋ねて) 父親の父が和人で、母がアイヌです。(現在の配偶者は) アイヌです。両親ともアイヌです。(祖父母は) 母方のほうが両方ともアイヌです。こっちが父だけアイヌ。」(壮年層)
- ・「この絵が織物。昔の人の。木彫り。これが本当の文様。粗末にできないの。昔からね(家に伝わるもの) 私で8代にもなっている。中略…私だけでいま4代になるよ、私の子ども、孫ができて。孫がお嫁に行って、ひこ孫ができたなら4代でしょう、私。」(老年層)
- ・「父はアイヌです。母もアイヌです。(父方祖父母) アイヌです。(さらにその上も) たぶんアイヌです。(母方祖父母も) アイヌですね。」(老年層)

このように、アイヌ民族のルーツについては、年齢層が高いほどに詳しい者が多い。しかしその一方でどの年代においても、アイヌ民族であるということを意識的に伝えられたという経験を持つ者は見られなかった。アイヌであることを自然に、当たり前を受け継いでいるか、それとは逆に差別経験や意識をともなったマイナスの経験とともに、受け継いでいるといえよう。

- ・いや、そうですね、父方の周りが、アイヌの子どもだっていう風に言って、あまり良く思われていなかったの。父の兄弟たちからはあまりその、アイヌってということによく思われてなくて。なので、よく母方の方に行ったら結構、話を聞いていくうちにああ、アイヌだって。(青年層)
- ・そうです。私の父親。(母親) も、そうですね。
(父方祖父母は) そうですね、アイヌです。半分というか。そうですね。そうだと思うんだけど。
(父方祖母は) アイヌです。(母方祖父は) そうですね、アイヌです。(壮年層)
- ・なんせ学校時代ね、「あんたアイヌの血統だ、アイヌだ」って言われたのが何回かあって、それで腹立ってその人に向かってかかったっていう。それは覚えあるんですよ。(親は幼い時に亡くなり、告知されたことはないが、馬鹿にされてわかった) (老年層)

第3節 現在の生活

現在の生活について世帯の状況を見ていこう。対象者の世帯の状況は、3世代の拡大家族が1名確認された以外はすべて核家族であった。世帯の構成人数は1人世帯が3名、2人が22名である(表1-6)。2人世帯の22名の内訳は青年層が3名、壮年層が5名、老年層が14名となっており、2人世帯は老年層で多い傾向にあった。3人世帯は9名、4人世帯は9名、5人世帯は2名、6人世帯は3名であった。白糠町では世帯の平均人員が2.1人と核家族化がすすんでいるが、それと比較すると世帯の構成人数は多少多いといえるだろう。

それらを婚姻の状況と合わせて見てみる。青年層では婚姻の状況は未婚が5名、既婚が8名、離別が3名となっている。未婚が5名いながら青年層で1人世帯の者は見られない。つまり未婚の5名はすべて親と同居しているといえる。また既婚が8名であるが、すでに子どもがいる場合や、親世代、祖父母世代と同居している場合などが見られる。壮年層でも1人世帯は見られず、2人が5名、3人が2名、4人が2名、5人以上が3名と2人世帯が最も多い。ところが老年層になると1人世帯が3名、2人が14名とほとんどが2人以下の世帯となっている。

すべての年齢層を総合してみても、世帯構成人数が1人、2人を合計すると52.1%と半数を超える。5人以上の世帯は1割程度(10.4%)しか見られない。現状では半数程度が2人以下の世帯構成であるが、子どもが自立して別世帯となっている場合もある。

子ども数について見てみると(表1-7)、子ども1人が14.6%、2人が29.2%、3人が18.8%、4人が14.6%、5人が8.3%と、子どもが3人以上の者も41.7%と平均的な子ども数よりも多いことがわかる。

表1-6 世帯の人数

世帯人数	青年		壮年		老年		合計	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	実数	パーセント
1人	0	0	0	0	3	0	3	6.3
2人	2	1	4	1	10	4	22	45.8
3人	4	1	1	1	2	0	9	18.8
4人	4	2	1	1	1	0	9	18.8
5人以上	0	2	1	2	0	0	5	10.4
合計	10	6	7	5	16	4	48	100.0

表1-7 子ども数

子ども数	青年		壮年		老年		合計	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	実数	パーセント
1人	2	1	1	1	1	1	7	14.6
2人	3	2	4	1	3	1	14	29.2
3人	2	0	1	1	5	0	9	18.8
4人	0	1	0	0	4	2	7	14.6
5人	0	0	1	1	2	0	4	8.3
未婚・非該当	3	2	0	1	1	0	7	14.6

第4節 老年層に見られる小規模世帯の実情

先に老年層に1人世帯、2人世帯が多いことを確認した。高齢であり家族数が少なければ、日常生活の維持に対して不便はないだろうか。老年層の中で世帯構成人数が2名以下の者は17名だった。さらにその中で世帯収入が200万未満の厳しい生活であることが予測される11名についてまとめたのが表1－8である。

この表を見ると、高齢でありながらも1人で生活している者が3名ほど確認できる。3名のうち1名は未婚、残りの2名は死別である。2人世帯は8名であり、すべて子どもを持っていた。先に確認した子ども数については、1人が2名、2人が2名、3人が2名、4人が2名、5人が2名と決して少なくない。しかし、そのうち子どもと同居しているのは2名のみであり、ほとんどが子ども世代と別居しているという実態である。

しかし、別居している子どもの所在地については、ほとんどが白糠・釧路である。白糠や釧路という近い地域にはいない者は1名のみであった。結婚や就職で本州に居住している例もあったが、そのような場合でも、他の子どもは白糠近郊に居住している。

また世帯収入を見ると11名中7名と半数以上が生活保護や障害年金を受給している。また他の4名も世帯の年収が100万円前後と低く、厳しい生活が強いられている。生活保護を受けているという現実、子ども世代についても親を援助することができる経済状況ではないことを示しているが、実際に子ども世代から経済的な援助を得ている者は確認できなかった。

表1－8 老年層の小規模世帯

婚姻状況	性別	世帯員数	子ども数	子ども居住地	経済的援助	世帯収入
既婚	女性	2人	1	白糠在住	援助なし	生活保護
死別	女性	2人	5	白糠在住	援助なし	生活保護
既婚	女性	2人	4	白糠・釧路	援助なし	生活保護
死別	女性	2人	3	釧路在住	長男と同居	100万未満
未婚	女性	1人	－	なし	援助なし	100万未満
既婚	男性	2人	1	白糠在住	妻と同居	100万程度
死別	女性	2人	2	釧路在住	長男と同居	100万未満
死別	女性	1人	2	白糠在住	援助なし	生活保護
既婚	女性	2人	5	白糠・釧路在住	援助なし	生活保護
既婚	女性	2人	4	道内・内地	援助なし	生活保護
死別	女性	1人	3	白糠・内地	援助なし	障害年金

- ・大変です。とくに病气してから。毎日通ってるから、バス代が結構、1,360円ぐらい、1日。それが1か月だと結構なるのですよ。でも、土日が休みだから、病院が休みの日は休みだからあれなのですけど、バス代にだいぶん取られてる。大変です。
- ・病院代とそっちの食品の方に取られるから、6月が6千なんぼか。今月が1万円ちょっと。生活保護ね。本当に大変です、毎日病院行ってますから（家族の見舞に）。だから病院の人たちも「母さん、毎日でなくても良いんだよ」って言うけど、でも子どもたちも誰もいないしょ。そしたらやっぱり、ちょっとでも顔見てやらないと。私も落ち着かないの。1回行って顔見てくれば（落ち着く）。何回も言うけども、前みたく孫いればね、あれだけでも。だから帰ってきてから、そればかりが悩み。

しかし、子ども世代から経済的な支援を受けていなくても、日常生活において交流を持つ者は多く見られる。アイヌ文化に関わる行事を通しての交流や、お盆や正月という年間行事を通じた交流、さらには病院などの通院を援助してくれる例もある。それらのいわば情緒的支援も彼らの生活を支えているといえよう。

- ・身内が多いんだわ。子どもたち、ここの下の子ども3人。こっちの旦那も入ったし息子も入っているし、私はひとりだけど、妹の子どもが2人いて男の子と女の子、それで孫がいるでしょ。だから…3人、4人、5人…
- ・嫁さんと行き来して。私足悪いから、その嫁さんに釧路まで1か月に1回病院行ってくるの。(中略) … (内地の子どもは) 男の子と女の子。お盆にみんな来てった。

第5節 家族形成のスタート（結婚）

さて、彼らは結婚においてアイヌ民族であることを意識したのだろうか。アイヌ民族の結婚については、結婚がアイヌであることと向き合わざるを得ないイベントになっていること、とくに女性にとってアイヌであることを引き受ける覚悟を試される時であることが指摘されている（小野寺2012）。しかしその内実は地域によって色合いが異なっていた。たとえば、新ひだかの調査ではアイヌの血筋を薄めるために、戦略として和人と結婚するという話を聞いたが、伊達調査においてはそのような事実は聞かれず、その理由としてアイヌの血が薄いことをあげる者が多かった。

白糠ではどうだろうか。まず結婚の際に「アイヌであること」を意識したのかについてである。これには2つの傾向があった。1つは年代によって異なることと、もう1つは男女によって異なることである。

まず年代によって異なるという傾向については、結婚の際にアイヌであることを意識しなかったと話した者が青年層では36.3%と3つの年代の中で最も多かった。

- ・ ないです。いや、別にそこは喋っては（いません）…ここら辺はそういう人がいっぱいいるので、まあいても不思議では、そもそも不思議ではないだろうみたいな。なので別に…。わざわざそこを、こういう人だからとかっていう説明はしません（アイヌであること）。(青年層)
- ・ (妻がアイヌであることを和人夫) まったく気にしない。まったく気にならない。うん、(最初からアイヌであることを) 知ってて。(青年層)
- ・ 結婚する時にやっぱり、周りでも聞いたりするから自分でも気にするんだ、やっぱりアイヌだっていうことは気になる。(実際の結婚の際には) 相手の親はそういうの、別に日本人ならいいんじゃないって言うようなぐらいのおおらかな感じの親だったから (問題はなかった)。(青年層)

このように青年層では気にしないとする者のほうが多く、気にするという者も実際の結婚では、問題がなかったという。しかし壮年層では結婚の際に民族性を考えたとする者が45.5%と3つの年代の中で最も多い。

- ・結婚する時に、アイヌがどうのこうのじゃなくて、「なぜ反対するのかな」って思われた時、うちの旦那の生い立ちのことで、後からわかったことなんだけど、反対された。(中略)自分(夫の母)がシャモであって、アイヌのうちにもらわれてというか、育てられて暮らしてきたんだけど、自分の息子にはメノコの人をもらってもらいたくなかったのかな。(壮年層)(配偶者母和人)
- ・されました。アイヌっていうだけでね。その時腹が立ってね。「アイヌだから反対って、おかしくない？」って。本人の性格とかを見て反対されるならわかるけど、ただ、アイヌの血を引いているからって反対する意味がわからないって言ってね。(壮年層)(本人アイヌ/配偶者和人)
- ・ありましたね、これは。反対されましたよ。私の親戚一同。(中略)…「何が悲しくてアイヌと結婚するんだ」ってうちの親戚一同は総スカンでしたね。(壮年層)(本人和人/配偶者アイヌ)

壮年層では青年層に比べ、結婚の際に民族性が問題になった経験を持つ者が多い。また老年層はアイヌの血筋が壮年層よりも濃い。そのため結婚の際にアイヌであることを意識した者が多いことが予測される。

ところが老年層では、意識した者が36.8%と壮年層よりも低くなる。しかしこれは配偶者との関係も影響している。壮年層では結婚経験を持つアイヌ9名のうち配偶者もアイヌである者はわずかに2名のみである。それに対して老年層は結婚経験を持つアイヌ13名のうち、配偶者もアイヌである者は6名と半数程度がアイヌ同士の結婚なのである。また老年層では和人とアイヌの結婚についても「問題がない」「気にしない」という例も多く見られる。

- ・うちの父ちゃんもアイヌだから、その頃うちの親がアイヌで、メノコで、一人はうちの父さん入る前にお母さんは死んじゃったけど、お母さんもメノコでしょう？ お父さんもアイヌでしょう？ うちの父さんもアイヌでしょう？ ○○(地名)のアイヌだもん(笑)(本人アイヌ/配偶者アイヌ)
- ・そういうこと考えたことないな(中略)うん。結局うちの近くの本家が足寄近くにそうやっていたからね。だから別にそんなに特別な人間とは思ってないし。(本人和人/配偶者アイヌ)
- ・結婚する時、恋愛する時はさ、阿寒湖で恋愛したからね、アイヌって、相手はシャモだから、アイヌっていうのははっきりわかって結婚したの。1回目は。ただ向こうの親は反対だったみたい。(本人アイヌ/配偶者和人：初婚・再婚とも)

もう1つの側面である性別による違いについても、平均して女性では41.4%、男性では33.3%が意識したと答えており、男性よりも女性のほうが10ポイントほど高くなっている。とくに女性が意識した比率が高い壮年層では、女性が57.1%に対して男性は25.0%しか意識していない。

妻がアイヌであることを「まったく気にならない」(和人夫)、「全然、気にした事ないです」(アイヌ夫)と、本人が和人であるなしにかかわらず気にならないとする例は少なくない。またその理

由として、アイヌ同士であるからという理由の他に、和人とアイヌとの結婚の場合、アイヌが多い地域であるがゆえ、アイヌとの結婚は珍しいことではないという見方もある。

- ・（妻がアイヌであることを和人夫）まったく気にしない。まったく気にならない。うん、（最初からアイヌであることを）知ってて。（青年層：本人和人／配偶者アイヌ）
- ・全然、気にしたことないです（アイヌ夫）。（壮年層：本人アイヌ／配偶者和人）
- ・そういうこと考えたことないな（中略）うん。結局うちの近くの本家が〇〇近くにそうやっていたからね（アイヌが多い地域）。だから別にそんなに特別な人間とは思ってないし。（老年層：本人和人／配偶者アイヌ）

では結婚生活そのものはどうだろうか。これについては何らかの影響があったという話をした者は壮年層女性で2名、老年層女性で3名と多くはない。しかし、その現状を聞くと非常に厳しい経験をしていることがわかる。

アイヌであることで差別を受けたため、子どもにはそのような思いをさせたくないと思い、和人と結婚したが配偶者は良くて周りがアイヌであることで差別をされたという発言や、結婚の時点ではアイヌであることを了承して結婚していても、結婚後にアイヌであることを理由に差別的な扱いをされたとするものである。

- ・さっき言ったホステスさんやった時に、最初の、旦那さんじゃない、その前に付き合った人に言われて、別れた言葉が、「俺なんか男といるみたいだな」って言われた。だから、この毛ね、彼氏だと思うから、だんだん慣れてくると、多少生えててもいいかみたいな感じでいたら。（壮年層）
- ・結局あなたはアイヌだし、北海道だし、この人間じゃないんだからって言って、一切全然。何かにつけても話を決める時は家族だけで。私はポツンと。無料の家政婦みたいだった。（壮年層）
- ・一番最初の結婚、それが原因で別れたもん。わかってて結婚したくせして（笑）（老年層）
- ・いやいや、全然もう、差別されてましたよ。うちの妹はもろに差別されてて。姉も親族とか家族に紹介してもらえなかったって。（老年層）
- ・言わないよ。言えなかったし。旦那は知ってたよ。「私はアイヌだよ、それでもいいの?」「いって」って言ったけど、家族には言っていなかったの。結婚式にうちの家族が来た時に哑然としてた、みんな。（老年層）

第6節 結婚と別離・再婚

アイヌであることを理由に結婚生活で差別をされた経験を確認した。そのようなことが積み重なり、結婚生活の中で「離婚」を経験した者も少なくない。女性の31.0%、男性の25.0%が離婚を経験している（表1-9）。また配偶者との「死別」を経験した者も女性の31.0%、男性の16.7%が経験している。つまり性別で見ると女性の6割以上が配偶者との離婚や死別を経験しているのであ

る。

複数の結婚経験を持つ場合に多く見られたのは、配偶者がアイヌなのか和人なのかということ意識しているということである。

さらに「何回も結婚したんですけど…アイヌの人と結婚して一番幸せだったって言ってましたね。」や、「2番目の夫の時は、…子どもをかわいがってくれなかった…3番目の夫の時は幸せだった。アイヌだったからね」など、アイヌか和人かを意識するばかりでなく、それを結婚に対する評価と対応させていることがある。

アイヌの血筋を引く者にとって、結婚生活が上手くいっている、上手くいっていないという評価は民族性と結びついていると見ることができる。

- ・まあ何回も結婚したんですけど(笑)(妹が)最終的にアイヌの人と結婚して一番幸せだったって言ってましたね。(老年層)
- ・結婚する時、恋愛する時はさ、阿寒湖で恋愛したからね、アイヌって、相手はシャモだから、アイヌっていうのははっきりわかって結婚したの。1回目は。(老年層)
- ・ありますよ。1番最初の夫の時はそうだったし、2番目の夫の時はアイヌとは関係なかったけど、子どもをかわいがってくれなかったからだね。3番目の夫の時は幸せだった。アイヌだったからね(故人)。(老年層)
- ・主人が亡くなったんですけども、結婚していました。○年前12月に亡くなった。(壮年層)

表1-9 結婚への影響

既婚者のみ		青年 (N11)		壮年 (N11)		老年 (N19)		比率	
		女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
結婚の際に民族性を	意識した	2	2	4	1	6	1	12 (41.4)	4 (33.3)
	しなかった	5	2	3	3	9	3	17 (58.6)	8 (66.7)
アイヌであることが	影響した	0	0	2	0	3	0	5 (22.7)	0 (0.0)
	しなかった	7	2	2	4	8	3	17 (77.3)	9 (100)
離別・死別経験	離婚あり	3	1	3	0	3	0	9 (31.0)	3 (25.0)
	離婚なし	4	3	2	4	5	2	11 (37.9)	7 (58.3)
	死別あり	0	0	2	0	7	2	9 (31.0)	2 (16.7)

※アイヌであることの影響の有無については不明を除いている。

第7節 次世代への告知

アイヌ民族の家族として、それを次の世代に伝えていくことをどのようにとらえているのだろうか。子どもにアイヌ民族であることを伝えたか否かについて、青年層では「伝えた」とする者は1名と少なく、多くが「自然にわかっている」「自然に伝えている」とする者が多い。「伝えていない」とする者は2名のみだった。次に壮年層を見ると、「伝えた」とする者と、「自然に(伝えた)」とする者がそれぞれ5名と同数である。伝えていないとする者はわずか1名である。老年層については、「伝えた」とする者が8名、「自然に」5名、「伝えていない」4名となっている(表1-10)。

表1-10 子どもへの告知と継承

		青年	壮年	老年
アイヌ民族であることを	伝えた	1	5	8
	自然に	8	5	5
	伝えていない	2	1	4
伝えたアイヌ文化の内容 (複数回答)	踊り	5	3	5
	アイヌ語	2	2	2
	刺繍	1	0	0
	行事・祭り	2	3	3
	儀式	0	2	2
	その他	0	3	3

それでは、「自然に伝える」とは、どのようなことだろうか。

- ・なんていえばいいのかね。本当に自然にですよ。自然でなんか、まだ覚えていたのがアイヌのお面が実家の方であって、それ見ていて段々。お母さんも話して。結局、そう、自然ですかね。(青年層)
- ・そうですね、一緒にお祭りとか、行事ある度に一緒に行ってるんで。そうですね。わかる歳くらいには、わかってるのかな、自分でも(笑)(青年層)
- ・特別伝える必要もなく、やっぱり生活の一部だったからね、うちの阿寒湖の子どもたちは。自然に覚えたんじゃないかな。(壮年層)
- ・うちの舅は儀式だとかアイヌ協会の事をやりましたので、必然的に、物心ついた時から「祖父ちゃんはアイヌの血を引いてる、アイヌの行事をやってる」っていう事を知ってたと思うので。小さい時からわかってたと思いますよ。一緒に暮らしてたので。(改めて伝えた)っていう事はとくにないです。もう、本人わかってましたから。(壮年層)
- ・いやいや、そんなに改めてはしない(アイヌの血筋だと伝えること)。自分がアイヌの子どもだから。自分の息子たちはね。そんなね、悪い気はなかった。ない。自分も半分アイヌだから、そんな事はね、気にもしない。(子どもも)気にしてない。「俺はアイヌだから」って。(老年層)

このように「自然に」とは、生活のなかで「自然に」アイヌであることを認識しているはずという考えにもとづいている。その根拠となるのがアイヌ文化との触れ合いである。「アイヌのお面」や「祭り」「儀式」に触れることで、子どもが自然にアイヌであることを「知っているはず」とする。また「阿寒湖」というアイヌの象徴的な土地に住んでいることで、生活のなかにアイヌ文化が埋め込まれていると考えることもできる。

これらに共通するのは、回答者自身は「自然に」と答えているが、それは無意識であったとしても、生活のなかでアイヌ文化を選択していると見ることができる。アイヌ民族であっても、それらの文化を意識的に排除することも可能であろうが、少なくとも「自然に」と答えた者たちは、アイヌの文化が日常生活のなかに身近に存在するのであり、そのような現状にあることは、選択的にアイヌ文化を取り入れているといえるのではないだろうか。

次にアイヌであることを子どもに「伝えた・言った」とする者の発言を見てみよう。

- ・ 言ったしっていうか「お母さんはアイヌだからね」って、まじまじとやったつうか。うん、そうだね、彼らが保育園ぐらいの時には、もう「何で毛深いの」とか「毛生えてんの」とか言われて「いや、アイヌだからだよ」って。説明したことはあるね、子どもに。「だから、お前もアイヌの子どもだからアイヌの血が入ってるよ、半分ね」って。(青年層)
- ・ 「パパはこうだよ」って。「じいちゃんがこうだから、パパもこうだよ」ってはある。うん。小さい頃から、わかる頃からもう、そう言ってる。(壮年層)
- ・ だから子どもたちも、「お母さんもお父さんもアイヌだからね」って言って、こういう保存会に入ってね、踊ったり歌ったりしてるから。子どもに小学校の時からそういうふうに行って、そういう保存会に入って、アイヌの事やってきたから。そうやって言い聞かせてきたから。「お母さんもお父さんもアイヌだからね」って言って、保存会に入って踊ったり歌ったりやってきたから。(アイヌ民族であると) 言ってありますよ、子どもに。(老年層)

また、アイヌ民族であることを子どもに「伝えた」「言った」とする者の発言の中には、「毛深い」など身体的な特徴を契機にしてアイヌであることを伝えたり、保存会での「歌や踊り」に参加する意味づけとしてアイヌであることを伝えている例も多い。

それは逆説的には、必要がなければアイヌであることを伝える意味や機会がないとも考えられる。アイヌであることを「言ったことはない」「改めてはしない」「気にもしない」とはアイヌであることを伝える必要がない、あるいは機会がなかったといえるだろう。

つまりアイヌ民族であることを次の世代に伝えるということは、どれだけアイヌ文化に関することに触れたり、アイヌであることを意識したりするかによって異なるのであり、現代社会においてはかなり意識をしなければ、アイヌ民族であることを伝える機会さえ得られないといえよう。

- ・ いや、もう息子にそういうこと一切言わなかった…もう子ども産んでから、そういうこと、アイヌだからということを言ったことはないです。息子もそういうのを気にしないっっちゃうのか聞いたこともないしね。(老年)
- ・ いやいや、そんなに改めてはしない(アイヌの血筋だと伝えること)。自分がアイヌの子どもだから。自分の息子たちはね。そんなね、悪い気はなかった。ない。自分も半分アイヌだから、そんな事はね、気にもしない。(子どもも) 気にしてない。「俺はアイヌだから」って。(老年)

第8節 アイヌ文化の伝承

歌や踊りに参加することでアイヌ民族であることを意識する側面について見てきたが、歌や踊りを含む様々なアイヌ文化を後世に伝承することについてはどのような現状だろうか。

文化の伝承についてまず多かったのは、踊りやアイヌ語、祭りなどに連れていくということがあった。とくにその対象が幼児の場合、子どもの親ではなく祖母が孫を踊りに連れていくというケースがある。その場合、単に子どもへの踊りに伝承ということにとどまらず、祖母と孫の様子を見て、親世代も刺激を受けるということもあるようだ。

また白糠で行なわれている「アイヌ三大祭り」への参加を通して、文化を伝えているという発言も多かった²⁾。他には「アイヌ語を教えたり…」「アイヌ語を使って…」のように生活の中にアイヌ語を取り入れるということも多かった。

- ・自分の娘が、それこそ私の母親、娘のおばあちゃんと一緒にやり始めて、子どもたちのやっていることを私は親として見て、自分の子どもたちと一緒に頑張っていこうかなと思える気持ちになれたみたいな、そこからですね。(青年層)
- ・家でもアイヌ語で教えたりとか、自分の知ってることはどんどん伝えていこうと思ってるし。息子ももうちっちゃいうちから踊りは踊ったりとか、そういうところから入っていったから。(青年層)
- ・こういう、白糠のこういうお祭りがある時は、アイヌの人のお祭りだからっていう事で、話はしてます。(子どもは)全然気にしてないみたいだ。(青年層)
- ・自分は絵本で、コロボックルだかの読んであげたりとか。あと、シシャモの話。むかし、食べものがなくて苦労した時に、神様にお願いしたっけ、柳の葉が流れて、それがシシャモになって助かったんだよって話。それから興味を持ち始めて。子どもって、そんなことから興味を持つのっていう感じですけど。(壮年層)
- ・うちのばあちゃん、私の母親が、この上で〇〇の練習、踊りの、アイヌ踊りの練習を、子どもたち連れてきてたから、だからもう物心ついた時から、うちの子どもらは、そういうのに触れてるから。うん、もう、目にしてるわけでしょ、アイヌ衣装もアイヌ踊りも、儀式も見てるし。(壮年層)
- ・(子どもには)そのアイヌの言葉はわかんないからね。たまたま炭おこして、たばこ汲んだり(供えたり)、シャケあげれよって。(父親が子どもに)詳しくは言わないけどね。何か先祖に対してのあれなんだって、話ししてたね。私もたまには、今、炉端はないんだ、うち。何回もうち建ててるからね。火鉢買って今度、そこで炭おこして、たまたまお酒あげたり、たばこあれして、私がね。(老年層)
- ・そういうのは、あれはもう。そんなのはもう。自分たちも元からアイヌ語使うよ。長男だってアイヌ語使って。「やっほーい」とか何とかってね(笑) それはもう、全部わかってきて。別に。うちの娘ももちろんそうだけど。(老年層)

また、伝える側である対象者自身も、アイヌとしての伝統文化を自らが理解し実践できるまでの蓄積を持っている者ばかりではない。ただし老年層の中にはアイヌ文化を日常的に体験してきた人々も少なからず存在する。自分が子どもの頃には、囲炉裏がありアイヌの料理を食べて生活してきたという体験を詳しく語るができる。しかし、それを次の世代に伝えたかということになると、アイヌ文化を保持している者がすべて次の世代に伝えている訳ではない。

そのような中で「ウチャシコマ」こそが重要であるという発言があった。「ウチャシコマ」とは、ユーカラやウエベケレが創作された話であることに対して、現実にあった話であると言われている。インタビューの中でも「自分のルーツを子や孫に伝える。」ことがウチャシコマであり、祖父母世代である対象者が、孫を連れて保存会の行事に参加する際、孫たちにその意味を伝えているという

ものであった。

「アイヌ民族の誇り、胸を張って生きれるようにする。そのためには、ムックリを覚えたり、歌を覚えたり、儀式のことを覚えたりしなきゃダメなんだよと会話をしながら、保存会の活動に参加する。」(老年層)

アイヌ文化を次の世代に継承するためには、文化や儀式を覚えるばかりでなく、その意味も含め伝えることが重要であり、その過程こそがウチャシコマなのである。また保存会の行事がそれを伝える契機となっているといえよう。本来、アイヌ文化保存会は、アイヌ文化の保存と伝承がその中心的な目的である。しかしこれまで見たように、家族で保存会の行事に参加することを通して、親から子への様々な伝承がなされていることが確認されており、アイヌ文化保存会の活動が本来の目的以外にも重要な役割を果たしていることがわかった。

おわりに

本調査の対象地域である白糠は、本人がアイヌであり父親・母親もアイヌの血筋である比率が、これまで行った調査の中でも高い方であった。しかしながら年代が若くなるにつれアイヌの混血が進んでいる実態は他の地域と同様であった。

また人々の世帯構成については、全般的には小規模化していると見ることができるが、別居している子ども世代との交流を持つ者が多かった。しかしそれは日常的な交流であり、老年世代において経済的な支援は確認されず、子ども自身も厳しい経済状況にあることが推察された。

結婚については白糠においても和人とアイヌとの結婚がすすんでおり、他の地域と同様に年齢層が若いほどアイヌであることを意識する者が少なかった。一方でとくに壮年層ではアイヌであることで、厳しい経験を余儀なくされた者が多く、中にはそれを理由に離婚している事例もあり、複数回の結婚経験を持つ者も少なくなかった。またそれらの結婚生活がうまくいったか否かを自分自身で評価する際に、「アイヌ同士」「和人とアイヌ」など民族性と結びつけている面があった。

最後にアイヌであることを次の世代に伝えるかどうかは、アイヌ文化に関することに触れたり、アイヌであることを意識したりするかによって異なる。現代の社会では、意識しなければアイヌ民族であることを伝える機会を得られない。そのような中でアイヌ文化保存会の活動は、文化を保持し伝承することにとどまらず、各々の家族においてアイヌであることを伝える事にも大きく影響しているといえよう。

注

- 1) 対象者の中には釧路に居住している9名が含まれている。
- 2) 「アイヌ三大祭り」については、本報告書第5章を参照のこと。

参考文献

小野寺理佳, 2012, 「アイヌとジェンダー」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告書 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告

書——』北海道大学アイヌ・先住民センター, 61-93.

品川ひろみ, 2014, 「アイヌの血筋と次世代への意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書
31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学
研究室, 21-32.

インターネット資料

片山龍峰「言い伝えとアイヌの世界観」<http://www.frpac.or.jp/about/files/sem1204.pdf>

(品川ひろみ)